

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	学習に関する完全主義傾向が達成動機や達成目標に及ぼす影響
Author(s)	木村, 早紀子; 藤木, 大介
Citation	学習開発学研究 , 13 : 69 - 78
Issue Date	2021-03-30
DOI	
Self DOI	10.15027/50808
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050808
Right	Copyright (c) 2021 広島大学大学院人間社会科学研究科学習開発学領域
Relation	



学習に関する完全主義傾向が達成動機や達成目標に及ぼす影響

木村早紀子¹・藤木 大介
(2020年11月30日受理)

Effects of perfectionism in learning on achievement motivation and achievement goals

Sakiko KIMURA¹ and Daisuke FUJIKI

Abstract: Perfectionism, the excessive expectation of perfection, affects learning motivation and behavior. There are two major aspects of perfectionism: (1) a tendency to set high goals (personal standards) and (2) a tendency to care too much about failure (concern over mistakes). Concern over mistakes has long been regarded as a single concept; however, it can be divided into that for the results of achievement behavior and that for the process to attain conclusive results. Therefore, we divided the concept into two and examined the relationship between achievement motivation and achievement goals. A questionnaire survey of university students found that when learners care excessively about failure, they are motivated by a sense of anxiety about failure as well as a sense of fulfillment or competition with others. With regard to goal orientation, it was suggested that having high goals leads to goals for improving one's own ability and to goals for obtaining positive evaluation from others, and that concern over the results of achievement behavior leads to goals for avoiding negative evaluation from others.

Key words: perfectionism, goal orientation, achievement motivation

キーワード: 完全主義, 達成動機, 目標志向性

問題と目的

学習場面において学習者がよい結果を求めて学習に取り組むことは、主体的な学びにつながる適応的な姿である。そして、よい結果を求めることは、学習への高い動機づけにつながる。一方で、よい結果を過剰に求めすぎたり、完璧を求めすぎたりすると、思ったとおりの結果が得られないことが増え、それが重なるとやる気を失うことにつながりかねない。こういった過度に完全性を求めることを完全主義という(桜井・大谷, 1997)。また、完全主義は完全性を向ける方向によって、自己へ向けるもの、他者へ向けるもの、社会から向けられているものの3つがある(Hewitt & Flett, 1991)。この中で特に学習との関わりが大きいのは、自己志向的完全主義であろう。したがって自己志向的完全主義(以下、完全主義)傾向の高い者は、学習場面において意欲をもって取り組むという適応的な態度につながる一方で、完璧を求めすぎるあまり過剰に取り組むなど不適切な行動にもつながりやすいといえる。

¹ 広島大学大学院教育学研究科

これまで完全主義に関しては、健康面や対人関係での問題につながることや (cf. Stoeber, 2018)、完全主義がどう形成されるかなどについて研究が進められてきた (cf. 櫻井, 2019)。一方で、学習とのかかわりに関する研究は比較的少ない。その中で Bieling, Israeli, Smith, & Antony (2003) は、完全主義が定期試験における目標の高さや次の試験に向けてより学習しようとする態度につながることを示している。しかしながら完全主義傾向が高い者は、極端で厳しいパフォーマンス評価を行い、目標の達成に失敗すると自己批判的になりやすい (Shafran, Cooper, & Fairburn, 2002)。そして、不完全を受け入れられず努力を続けるにも関わらず、自己に課した目標より低い結果に終わり、目標と実際に達成した成果との間にギャップを感じる (胡, 2017)。これらのことから完全主義傾向が高いと、自己のパフォーマンスへの評価が厳しくなり、思った結果が得られない経験も多くなると考えられる。さらに石田 (2005) は、完全主義とテストに向けた情報収集量やそれを使ったテストの得点との関連を検討し、完全主義傾向が高い者は、情報を数多く収集するにも関わらずテストの得点が低いことを示している。

このように完全主義は、学習への動機や行動に影響するが、完全主義はいくつかの側面から成る特性であり (Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate, 1990)、ポジティブな側面とネガティブな側面の大きく 2 つに分けて学習に関する達成動機との関連を見ることができる (Stoeber & Otto, 2006)。ポジティブな側面としては高い目標を課する傾向 (高目標設置)、ネガティブな側面としては失敗を過度に気にする傾向 (失敗過敏) が挙げられている。胡 (増井)・岩永 (2016) によると、高目標設置というポジティブな側面は、自分なりの達成基準への到達を目指す自己充実達成動機および他者に勝つことで社会から評価されることを目指す競争的達成動機に正の影響を及ぼす。一方で、失敗過敏というネガティブな側面は、自己充実達成動機に負の影響、失敗を避けようとする失敗回避動機に正の影響を及ぼすことが示された。

しかしながら、完全主義のネガティブな側面である失敗過敏については、さらに詳しく見ていく必要がある。失敗過敏とは失敗を過度に気にする傾向のことであるが、失敗は、立てた目標が達成できないという結果での失敗と、目標に向かう途中でミスといったプロセスでの失敗の大きく 2 つに分けることができる。実際の学習場面を考えると、学習者が常に 100 点満点を取ることはできないように、結果での失敗を完全になくすことは不可能である。また、プロセスでの失敗も習得を目指す中では経験せざるを得ないものである。結果に対する失敗は、達成を目指している目標の価値がどれだけ高いかという点で学習者のやる気を低下させる原因となる可能性が高い。一方で、プロセスでの失敗は、1 回のミスが直接目標達成の可否を決めるわけではないが、経験する回数が多くなりがちでミスが重なるとやる気を低下させる原因となる可能性もある。また、些細なミスに気にするほど最初に立てた目標への達成からそれで努力が結果につながりにくくなるため、プロセスに対する失敗過敏の方がより自己充実達成動機を下げて失敗回避動機につながっていることが考えられる。このように質が異なる失敗を分けて達成動機との関連を検討することで、失敗過敏の中でもより不適応的な側面を明らかにできると考える。

ただ、完全主義のポジティブな面として高い目標を設定するということがあるように、目標をどう設定するかということも学習場面における完全主義を考えるうえで重要である。先行研究では実際のパフォーマンスや達成動機との関連について研究されているが (石田, 2005; 胡 (増井)・岩永, 2016)、その端緒となる目標との関連についても検証すべきではないかと考える。動機づけ理論の目標に関わる考え方には、達成目標理論 (Dweck, 1986) がある。この達成目標理論では、熟達目標と遂行目標という大きく 2 つの目標志向性を提唱している。熟達目標は、新しいことを習得してより有能になろうとする目標であり、遂行目標は、他者から自分の有能さについてのよい評価を得たり悪い評価を避けたりしようとする目標である。熟達目標をもつと、自分の能力に対する自信の高低に関わらず高い動機づけを維持する一方で、遂行目標をもつと、自分の能力に対する自信が高いか低いかによって、高い動機づけをもったり無気力に陥ったりすることが分かっている。これに対し、完全主義は「完璧にしたい」という高い目標を立てようとする認知傾向であり、その「完璧」という基準は完璧という他者との比較の必要のないある意味自己内のものであり、かつ、誰から見ても完璧という他者的な視点も含むものである。そのため、新しいことを習得しようという自己を基準とした熟達目標と他者からの評価を気にする他者を基準とした遂行目標のどちらの目標志向性にもつながることが考えられる。村山 (2003) は、達成目標を質問紙で測定した研究では一貫して熟達目標と遂行目標の相関が無相関もしくは弱い正の相関であることから、熟達目標と遂行目標を同時に持つ学習者がいる可能性を示唆している。この熟達目標と遂行目標を同時に持つ可能性の背景としても完全主義という認知傾向が関係していると考えられ、完全主義を達成目標理論の枠組みで捉えなおす必要があるといえる。

これらをつまみ、本研究では、完全主義と達成行動に関わる変数との関連を調べるため、それと直接関わる達成動機や、その端緒となる達成目標との関係について調べる。完全主義のより不適応につながりやすい側面の影響を詳細に検討するため、完全主義のネガティブな面である失敗過敏を結果に対するものとプロセスに対するものとに分けて、高目標設置とともに達成動機との関連を検討する。また、完全主義傾向が達成目標の設定にどう影響するかを明らかにするため、高目標設置や失敗過敏と目標志向性との関連を検討する。

方法

完全主義における高目標設置や失敗過敏の達成動機や達成目標との関係について検討するため、回想法を用いた質問紙調査を行った。

調査対象者

2つの国立大学の学生198名（A大学154名、B大学44名；平均年齢20歳）であった。

材料

フェースシート、完全主義の高目標設置に関する項目と目標志向性尺度、失敗過敏傾向を分類するための項目、達成動機尺度から成る質問紙を用いた。いずれの質問も具体的な学習場面を想定したものとした。

完全主義に関する項目 完全主義尺度は、高目標設置と失敗過敏からなった。完全主義の高目標設置に関する項目は、Frost et al. (1990) や桜井・大谷 (1997) を参考にし、学習場面に即したものを10項目作成した (Table 1)。また、失敗過敏に関する項目については、失敗過敏傾向を結果に対するものとプロセスに対するものとに分類するために、Frost et al. (1990) や桜井・大谷 (1997) を参考にしつつ、「最終的な目標達成場面での失敗を過度に気にする傾向（以下、結果に対する失敗過敏）」と「目標へ向かう過程でのミスを過度に気にする傾向（以下、プロセスに対する失敗過敏）」という定義に基づき、心理学を学ぶ学生11名の意見を反映させながら、それぞれ8項目と11項目の計19項目作成し、5段階評定（1=全く当てはまらない～5=非常に当てはまる）で回答を求めるものであった (Table 2)。

達成動機尺度 完全主義と達成動機との関連を検討するため、堀野・森 (1991) の達成動機測定尺度と、Revised 10-item version of the Achievement Motives Scale (AMS-R; Lang & Fries, 2006) を翻訳した「失敗恐怖」に関する項目 (光浪, 2010) を使用した。堀野・森 (1991) の達成動機測定尺度からは、下位尺度である自己充実達成動機尺度と競争的達成動機尺度のうち、胡 (増井)・岩永 (2016) と同様に各4項目を選択して用いた。なお、自己充実達成動機尺度の「結果は気に

Table 1
高目標設置尺度の項目

項目		
高目標設置 (α=.874)		
20.	どの教科でも高い点数や成績を目指そうと思っていた。	.840
13.	学期末テストや学年末テストでは、全教科で高い点数を取りたいと思っていた。	.774
11.	各教科の授業で新しい内容に入るときには、最終テストで満点を取ろうと意気込むことが多かった。	.735
22.	周りの人に比べて、いつも高い点数や成績を目標にしようとすると思っていた。	.697
8.	高い点数や成績を取るために努力することが得意であった。	.696
3.	高い点数や成績を目標にする方が、自分のためになると思っていた。	.637
5.	自分の知識や能力を最大限にひきだすような目標をもつべきであると思っていた。	.593
1.	学年や学期の始まるときから、いい成績を取るよう意気込むことが多かった。	.564
26.	高い点数や成績を目標に掲げるようにしなければ、自分は平凡な人間だと感じていた。	.400
除外された項目		
19.	簡単に取れる点数や成績ばかりを目標にしているのは、だめな人間になると思っていた。	

注) 左端の数字は項目順を示す。

Table 2
失敗過敏尺度の項目と因子構造

下位尺度 / 項目	I	II
I. 結果に対する失敗過敏 ($\alpha = .786$)		
2. 目標の達成に関わる試験やテストで少しでもミスをする、「こんな大事なところで間違えるなんて情けない」と感じていた.	.663	-.128
13. もし、目標にしていた点数や成績が取れなかったら、目標と近いものであったとしてもそれは達成とはいえないと思っていた.	.639	-.051
17. 目標にした点数や成績そのものを取らなければ、成功とはいわないと思っていた.	.629	.016
18. 目標が達成できなかったらどうしようとしてよく不安になった.	.622	.038
10. 目標の達成に関わる試験やテストで、細かいミスがないかどうか何度も見返して不安になった.	.515	.063
5. 目標が達成できなければ、自分は人並み以下だと思った.	.493	.161
6. 目標にする点数や成績を確実に取るために必要だと思う勉強は、すべてしようとした.	.493	-.041
11. 周りの人に比べて、失敗を気にする方だと感じていた.	.425	.015
II. プロセスに対する失敗過敏 ($\alpha = .821$)		
19. 人のノートでいいと思う書き方があると、それを取り入れてもう一度最初から書き直したくなった.	-.046	.717
12. 立てた目標を達成するための勉強をするとき、ノートをきれいに取らないと気がすまなかった.	.034	.698
14. 新しい目標を立てると、ノートも新しくしたくなる方だった.	-.126	.638
7. 授業中に先生が後から黒板に書き足したことでノートテイキングの予定がくずれると、いらいらした.	-.058	.608
3. 最初に重要な所に線を引く色分けのルールを細かく決めるが、その計画が崩れるようなことがあるといやになった.	.080	.584
9. 目標に向かって努力するときに、専用のノートなどのがんばりがみえる成果物をつくりたいと思った.	.046	.546
8. 急な用事が入ったことで、今日しようと決めていたことがやり切れないと、「明日はこの遅れを取り戻そう」というよりは「もうだめだ」と落ち込んだ.	.099	.543
16. ノートや問題集が汚れたりぬれたりすると落ち込んだ.	.005	.514
	I	II
除外された項目	I	.483
1. 目標に関わる範囲の問題集は、得意な部分、苦手な部分に関わらず、最初からとばさず解いていく方であった.		
4. 目標に向かって問題集を毎日決まったページすると決めると、決めたページ数を1ページでも下回る日があるだけでいやになった.		
15. 目標に向けて勉強をしているときに、答えが分からなかったり間違えたりすると、「自分の苦手が分かってよかった」というよりも「目標を達成できないかもしれない」と不安になっていた.		

注) 左端の数字は項目順を示す。

しないので何かを一生懸命やってみよう」という項目は、胡(増井)・岩永(2016)と同様に「結果は気にしないで課題を一生懸命にやってみよう」に変更した。また、光浪(2010)の「失敗恐怖」を失敗回避動機尺度として4項目を使用した。これらの3つの下位尺度(自己充実達成動機尺度、競争的達成動機尺度、失敗回避動機尺度)は、5段階評定(1=全く当てはまらない~5=非常に当てはまる)で回答を求めるものであった(Table 3)。

目標志向性尺度 完全主義と目標志向性との関連を検討するため、光浪(2010)の目標志向性尺度を使用した。達成目標理論の目標志向性に関する項目について、遂行目標は接近回避の観点より、自分の能力についてプラスの評価を得る目標としての遂行接近目標と、自分の能力についてマイナスの評価を避ける目標としての遂行回避目標の2つに分けられることが示されている(Elliot & Harackiewicz, 1996)。これより、熟達目標、遂行接近目標、遂行回避目標の3つの目標志向性を測定するAchievement Goal Scale(Elliot & Church, 1997)を翻訳した目標志向性尺度(光浪, 2010)が適切だと判断しこれを使用した。この光浪(2010)の目標志向性尺度は、熟達目標(6項目)、遂行接近目標(8項目)、遂行回避目標(3項目)の3つの下位尺度(計17項目)から成る(Table 4)。これらは5段階評定(1=全く当てはまらない~5=非常に当てはまる)で回答を求めるものであった。

手続き

2つの大学において、それぞれ講義時間の一部をかり、同一の手順で集団による調査を行った。質問紙では、具体的な学

Table 3

達成動機尺度の項目と因子構造

下位尺度 / 項目		I	II	III
I. 自己充實的達成動機 ($\alpha = .559$)				
9.	なんでも手がけたことには最善をつくしたかった	.598	.295	.348
6.	いろいろなことを学んで自分を深めたかった	.524	.118	.111
12.	人に勝つことより、自分なりに一生懸命やることが大事だとおもっていた	.476	-.232	.007
8.	結果は気にしないで課題を一生懸命やってみたかった	.451	-.124	.255
II. 競争的達成動機 ($\alpha = .802$)				
2.	他人と競争して勝つとうれしかった	-.069	.771	.107
7.	競争相手に負けるのはくやしかった	.034	.748	.120
11.	どうしても私は人より優れていたと思っていた	.031	.699	.275
5.	ものごとは他の人よりうまくやりたかった	.137	.682	.309
III. 失敗回避動機 ($\alpha = .721$)				
4.	成功するという確信がもてない場合には、何をするにも不安になった	.163	.206	.783
3.	すぐに問題を解決できない場合、私は不安を感じ始めた	.231	.215	.737
10.	たとえ誰も見ていないとしても、新しい状況ではかなり不安を感じた	.238	.269	.628
1.	自分次第で物事の多くが決定してしまう時、少し困難な状況で失敗するのが怖かった	.155	.018	.381
		因子間相関		
		I	II	III
			.053	.320
		II		.282

注) 左端の数字は項目順を示す。

習場面を想定した質問項目を用いたため、学習内容や授業形式がある程度統一されている時期として、小学生、中学生、高校生のいずれかの時期を想起しながら回答してもらった。なお、想起する時期は複数回答可とした。また、フェースシートでは、注意書き（個人を特定することはないこと等）や回答の例を示し、参加に同意するかどうかの回答、学部、学年、年齢の記入を求めた。フェースシートを記入してもらう前には、得られたデータの扱い方等、フェースシートの内容を口頭でも確認の上回答を求め、倫理的配慮も行った。また、回答の途中でやめなくなった場合には、その場で参加を中止できることも呼びかけた。回答にはおおよそ 10 分要した。

結果と考察

分析に当たり、リッカート尺度の数字と数字の間に丸をつける等回答に不備のあった 19 名のデータを除外し、179 名を分析の対象とした。

2つの失敗過敏と達成動機

完全主義に関する項目について、完全主義の中に高目標設置と失敗過敏の 2 側面あり、さらに失敗過敏が 2 つに分かれるという構造となると考えられるため、高目標設置と失敗過敏をそれぞれに因子分析を行った。

高目標設置に関する 10 項目について、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。ガットマン基準により当初 2 因子構造となったが、第 1 因子への負荷量の小さい項目を 1 つ除いたところ、想定通り 1 因子構造となったため、残った 9 項目を使用した（Table 1）。次に、結果に対する失敗過敏とプロセスに対する失敗過敏がそれぞれに因子を構成するかを探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）により検討した。．40 基準で因子負荷量の低い項目と．20 を基準に 2 因子にまたがって負荷量の高い項目を除外した結果、想定していた 2 因子に分かれた（Table 2）。また、達成動機尺度（12 項目）について探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。ガットマン基準により 3 因子構造となり、．35 基準で単純構造となっていたため、12 項目全てを使用した（Table 3）。

その上で、完全主義と達成動機との関係を検討するために、完全主義の 3 因子を独立変数、達成動機の 3 因子を従属変数とするパス解析を行った。最初に完全主義から達成動機の各因子へのパス、完全主義のそれぞれで因子間の相関、また、達

Table 4
目標志向性尺度の項目と因子構造

下位尺度 / 項目	I	II	III	
I. 熟達目標 ($\alpha = .773$)				
24. 授業中は、できるだけたくさんのことを勉強したいと思っていた。	.791	.213	.018	
23. 授業の内容をできるだけしっかりと分かるようにすることは、私にとって大切なことだった。	.707	.254	.134	
10. 授業の内容について、もっと幅広い知識や、もっと深い知識を得たいと思うことがあった。	.634	.063	-.308	
21. 私は、少し難しくても新しいことを勉強する方が好きだった。	.556	.131	-.174	
2. 授業では、簡単な内容よりも、少し難しくても面白い内容をする方が好きだった。	.467	.123	-.125	
4. 私は、授業で配布された資料を完全に理解したいと思っていた。	.449	.280	.084	
II. 遂行接近目標 ($\alpha = .876$)				
18. 私にとって、周りのみんなよりもよく思われることは重要であった。	.176	.849	.259	
12. 自分の能力が、他の人よりあるということを示そうと努力していた。	.207	.846	.169	
25. 家族や友達、他の人たちに良くできると思われるように、良い成績をとりたいと思っていた。	.232	.823	.246	
14. 周りのみんなよりも良い成績を取ろうと思うと、やる気が出た。	.287	.678	.111	
III. 遂行回避目標 ($\alpha = .661$)				
15. 私は、授業で悪い成績をとる可能性について心配していた。	.000	.287	.843	
16. “悪い成績を取ってしまったらどうしよう”と考えることがよくあった。	-.054	.211	.752	
6. 成績がつけられなければいいのに、と思っていた。	-.045	-.069	.330	
	因子間相関	I	II	III
	I		.269	-.020
	II			.273

除外された項目

- 7. 先生に変な質問をして、私の頭が悪いと思われるのが嫌だった。
- 9. 私は、他の人より良い成績をとることを目標にしていた。
- 17. 他の人より良い成績を取ることは、私にとって重要なことだった。
- 27. 私は、他の人より悪い成績をとらないようにしたいと思っていた。

注) 左端の数字は項目順を示す。

成動機の誤差間の相関という飽和モデルを想定して分析を行った。その分析結果において有意だったパスのみ残して再分析した結果、Figure 1.のようなモデルで十分な適合度が得られた。

まず高目標設置は、胡 (増井)・岩永 (2016) と同様に自己充実達成動機と競争的達成動機に正の影響 (.247 および.449) を及ぼし、完璧にしたいという高い目標を立てることは達成に向けた充実感や他の人より勝りたいという競争心に動機づけられることが示された。次に、失敗過敏は、結果に対するものとプロセスに対するものの2つに分かれ、結果に対する失敗過敏は自己充実達成動機および失敗回避動機に正の影響 (.196 および.485) を、プロセスに対する失敗過敏は競争的達成動機および失敗回避動機に正の影響 (.160 および.147) を示した。これは、失敗過敏を1つのものとして捉えている胡 (増井)・岩永 (2016) において、失敗過敏が自己充実達成動機に負の影響、失敗回避動機に正の影響を及ぼしたという結果とは異なるものであった。自己充実達成動機と競争的達成動機は誤差間で負の相関があり、2つの動機にトレードオフをおこさせる潜在的な変数が考えられるが、失敗過敏を2つに分けたことでプロセスに対する失敗過敏が自己充実達成動機と負の関わりを持つ競争的達成動機を説明するようになり、これが胡 (増井)・岩永 (2016) で失敗過敏から自己充実達成動機へと負の影響を与えていたものに相当すると考えられる。他方、このように失敗過敏を2つに分けることにより、結果に対する失敗過敏は自己充実達成動機へ正の影響を与えることも見出せるようになったと言える。

結果での失敗に対して過敏になることで自己充実達成動機が高まるのは、達成場面において失敗で終わりたくないという非常に強く考えることにより、自分なりの最高のパフォーマンスを目指して努力するようになるからであると考えられる。また、結果での

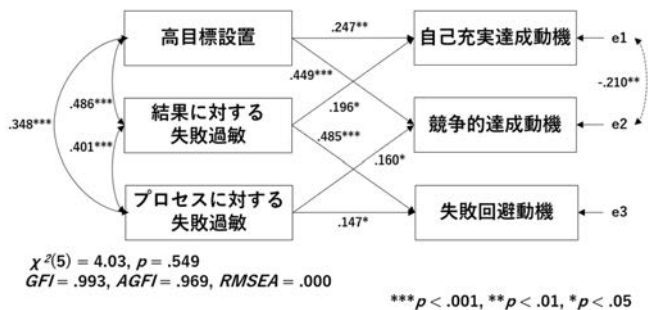


Figure 1. 完全主義と達成動機におけるパス解析結果

失敗に対して過敏になることで失敗回避動機も高まるのは、達成場面において失敗に終わりとなくと強く考えることにより、失敗してはいけないという不安も高まるからであると考えられる。これは、完璧を目指して前向きに取り組む一方で完璧でないことが許せず自己批判的になりやすいという完全主義の特性と対応していると考えられる。一方、学習プロセスでの失敗に過敏になることで失敗回避動機だけでなく競争的達成動機が高まるのは、学習プロセスで些細な落ち度もないよう気にすることで、その成果として他者より勝れることを期待させるのかもしれない。あるいは、学習プロセスでミスをしたくないと強く考える者は、自分が他者よりも勝っていることを示すことで自分自身のパフォーマンスに非がないことをこまめに確認しようとしているのかもしれない。最終的な達成の可否より学習プロセスでの失敗に目が向く学習者は、より身近である周りの学習者と比較することで自分自身を評価しようとしていることが考えられる。

ただし、失敗回避動機により強く影響していたのは結果に対する失敗過敏であり、プロセスに対する失敗過敏の方が経験回数も多く失敗回避動機をより高めているだろうという予測とは異なっていた。最終的な目標達成場面での評価は、最初に立てた目標に対して自分のパフォーマンスがどうであったかを評価するため、プロセスでの評価に比べて1つの評価がもつ価値が大きいと考えられる。さらに、完全主義の場合、自己評価は極端で厳しい (Shafraan et al., 2002)。そのため、結果での失敗に対して過敏になると、目標を達成できないかもしれないという不安がより大きくなり失敗回避動機が高まるといえることが考えられる。これより、経験の回数ではなく、評価の対象となるものの価値の大きさが失敗回避動機を高めていると考えられる。

完全主義と目標志向性

完全主義と目標志向性との関連を検討するため、光浪 (2010) の目標志向性尺度 17 項目について、探索的因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行った。遂行回避目標因子とされた遂行接近目標の項目 1 つを除き、その後 2 因子にまたがって負荷量の高い項目 (.30 以上) を除いていったところ、単純構造となったため、残った 13 項目を使用した (Table 4)。

その上で、完全主義の 3 因子を独立変数、目標志向性の 3 因子を従属変数とするパス解析を行った。最初に完全主義と達成動機との関係を検討した時と同様の飽和モデルを想定して分析を行った。その分析結果において有意だったパスのみ残して再分析した結果、Figure 2 のようなモデルで十分な適合度が得られた。

この結果から、高目標設置は熟達目標および遂行接近目標に正の影響 (.604 および .678) を示し、結果に対する失敗過敏は遂行回避目標に正の影響 (.439) を示した。村山 (2003) において熟達目標と遂行目標を同時に持つ学習者もいると示唆されていることを考慮すると、完全主義傾向が強い学習者は熟達目標と遂行目標の両方をもちやすいということが考えられる。熟達目標は自分自身の中での伸びを評価し、遂行目標は他者からの評価を得たり避けたりしようとする。高目標設置が熟達目標と遂行接近目標に影響を示したことより、完全主義傾向が強い学習者の「完璧」という基準は、自分自身の中でも他者から見ても完璧であることを求めていることが考えられる。

また、結果に対する失敗過敏は他者からの悪い評価を避ける目標につながることを示され、立てた目標を達成できなかったらどうしようと過度に不安をもつことは、他者から見ても完璧でないことを恐れていると考えられる。一方、プロセスに対する失敗過敏から目標志向性へのパスは残らなかった。プロセスに対する失敗過敏は、目標に向かう途中でミスに過度に気にする傾向を測っており、目標の達成に直接的には影響しない失敗であるために目標志向性へはつながらなかったと考えられる。

完全主義が達成目標の設定にどう影響するかを明らかにしたことで、完全主義の

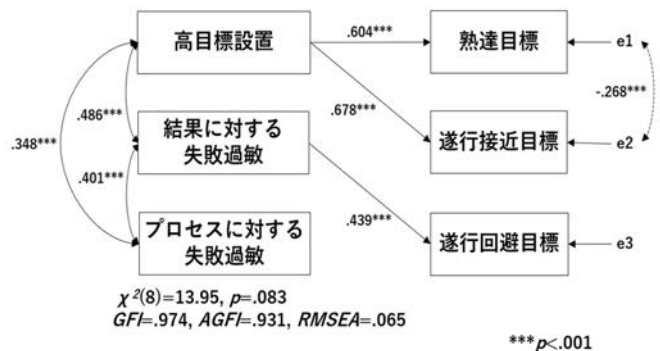


Figure 2. 完全主義と目標志向性におけるパス解析結果

高目標設置と結果に対する失敗過敏がそれぞれ目標志向性に影響していることが示された。特に高目標設置は熟達目標と遂行接近目標の両方に影響しており、熟達目標と遂行目標を同時にもつ可能性の背景として完全主義という認知傾向が関係していることが示唆された。また、プロセスに対する失敗過敏に関しては目標志向性へのパスはみられず達成目標の設定には関与しないことが示された。

なお、各尺度得点間の相関については Table 5 に示した。

Table 5
各尺度得点間の相関係数

	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
I. 高目標設置	.486**	.348**	.342**	.504**	.274**	.604**	.678**	.153*
II. 結果に対する失敗過敏		.401**	.319**	.269**	.544**	.230**	.322**	.439**
III. プロセスに対する失敗過敏			.102	.328**	.341**	.176*	.325**	.283**
IV. 自己充実達成動機				.003	.232**	.494**	-.005	-.057
V. 競争的達成動機					.223**	.138	.770**	.134
VI. 失敗回避動機						.107	.264**	.313**
VII. 熟達目標							.253**	-.036
VIII. 遂行接近目標								.164*
IX. 遂行回避目標								

** $p < .01$ * $p < .05$

まとめ

本研究では、完全主義と達成行動に関わる変数との関連を調べるため、それと直接関わる達成動機や、その端緒となる達成目標との関係について検討した。まず、完全主義のより不適応的な側面を明らかにするために、完全主義のネガティブな側面である失敗過敏を結果に対する失敗過敏とプロセスに対する失敗過敏の2つに分け、達成動機との関連を検討した。その結果、結果に対する失敗過敏とプロセスに対する失敗過敏の2つに分けることができ、結果に対する失敗過敏は自己充実達成動機および失敗回避動機に、プロセスに対する失敗過敏は競争的達成動機および失敗回避動機にそれぞれ正の影響を及ぼすことが示された。これより、失敗の質によって失敗過敏を2つに分けることで、学業に取り組むこと自体で自己価値が高まる面や他者との比較で自己を評価する面といった先行研究では見られなかった失敗過敏の側面が見いだされた。具体的には、目標達成場面での失敗に過敏になることは、達成基準の到達を目指した接近的な達成動機と失敗したくないという回避的な達成動機の両方につながる一方、目標へ向かう過程での失敗に過敏になることは、他者よりも勝りたいという他者を意識した達成動機と失敗したくないという回避的な達成動機につながると言える。

また、本研究では完全主義傾向が達成目標の設定にどう影響するかを明らかにするため、完全主義と目標志向性との関連を検討した。その結果、高目標設置は熟達目標および遂行接近目標に、結果に対する失敗過敏は遂行回避目標にそれぞれ正の影響を及ぼすことが示された。これより、完璧にしたいという高い目標をもつことは自分自身の能力を伸ばすための目標や他者からよい評価を得るための目標につながり、立てた目標の達成を失敗したくないと過度に気にすることは他者からの悪い評価を避けるための目標につながると言える。

完全主義は高目標設置を必要条件、失敗過敏を十分条件とすると、これらの組み合わせで動機の高さが説明されてきた。本研究の結果をふまえると、高目標設置は動機の高さを規定する評価の視点に関して、個人的／絶対的な側面と他者的／相対的な側面との両方を備えていると言える。個人内の絶対的な基準で評価をする熟達目標は、能力に対する自信の高低に関わらず高い動機づけを維持する傾向があるのに対して、相対的に評価をする遂行接近目標は、能力に対する自信の高低によって無気力型に陥る可能性もある (Dweck, 1986)。これらの目標につながっている高目標設置は、単純に動機の高さ

のみを規定するのではなく、結果的に動機の低下を招く面も内包していると言えよう。そして、動機に対して負の影響をもたらすのはこれまでの研究でも示されているように失敗過敏であるが、これについても評価基準の絶対/相対の両面から詳しく考えることができるようになった。つまり、達成場面における失敗に過敏になると、達成に向けた充実感と失敗を恐れる不安との両方に動機づけられるようになることが示された。これは、自分の立てた達成基準に対して自分のパフォーマンスがどうであるかを絶対的に評価しているといえる。一方で、目標達成プロセスにおける失敗に過敏になると、失敗を恐れる不安に加えて他者よりも勝つことに動機づけられて学習するようになることが示された。これは、他者と比べて自分のパフォーマンスがどうであるかを相対的に評価しているといえる。

ただし、本研究にはいくつかの課題が残されている。本研究では完全主義の高目標設置と2つの失敗過敏について別々に因子分析を行った。完全主義の中に高目標設置と失敗過敏があり、そのうちの失敗過敏を2つに分けたという構造を考慮した判断ではあったが、今後は完全主義の因子構造の階層性についても検討すべきだろう。実際に一回の因子分析で行ったところ、3因子に分かれるもののプロセスに対する失敗過敏に関しては、ノートテイクを中心に因子が構成されるなど限定的な内容となってしまったため、項目の再検討も必要かもしれない。

また、本研究では学習場面における完全主義について目標という観点から検討したが、完全主義傾向がある人が大きな目標の達成のために下位目標を細かく立てることもあるだろう。その場合、プロセスでの失敗と結果での失敗が区別できない場面も考えられる。そのため、目標の階層性について考慮することも必要だろう。

さらに、本研究では大学生を対象に回想法を用いて質問紙調査を行い、過去の学習場面について「～してみたかった」等の表現を使用した。こうした表現により後悔のニュアンスも含んでしまったかもしれない。そのため、実際に児童・生徒を対象とした調査も行うべきであろう。今後は、児童・生徒を対象とした調査、および適切な学習行動へと導く介入等を検討したりしていくことも必要だろう。

付 記

本研究は、2018年度に広島大学教育学部に提出した卒業論文を加筆・修正したものです。調査に協力してくださった学生のみなさまにお礼申し上げます。

引用文献

- Bieling, P. J., Israeli, A., Smith, J., & Antony, M. M. (2003). Making the grade: The behavioural consequences of perfectionism in the classroom. *Personality and Individual Differences, 35*, 163-178.
- Dweck, C. S. (1986). Motivational processes affecting learning. *American Psychologist, 41*, 1040-1048.
- 胡 綾乃 (2017). 不健全完全主義の瑣末な努力のメカニズムと適応性に関する検討, 広島大学大学院総合科学研究科博士論文
- 胡 (増井) 綾乃・岩永 誠 (2016). 学業場面における不健全完全主義の動機づけに伴って自己価値および失敗の反すうが及ぼす影響 パーソナリティ研究, *24*, 190-201.
- Elliot, A. J., & Church, M. A. (1997). A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology, 72*, 218-232.
- Elliot, A. J., & Harackiewicz, J. M. (1996). Approach and avoidance achievement goals and intrinsic motivation: A mediational analysis. *Journal of Personality and Social Psychology, 70*, 461-475.
- Frost, R. O., Marten, P., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research, 14*, 449-468.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991). Dimensions of perfectionism in unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology, 100*, 98-101.

- 堀野 緑・森 和代 (1991). 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, *39*, 308-315.
- 石田 裕昭 (2005). 大学生の完全主義傾向と課題解決方略の非効率性——なぜ彼らの努力は報われないのか—— 社会心理学研究, *20*, 208-215.
- Lang, J. W. B., & Fries, S. (2006). A revised 10-item version of the achievement motives scale: Psychometric properties in German-speaking samples. *European Journal of Psychological Assessment*, *22*, 216-224.
- 光浪 睦美 (2010). 達成動機と目標志向性が学習行動に及ぼす影響——認知的方略の違いに着目して—— 教育心理学研究, *58*, 348-360.
- 村山 航 (2003). 達成目標理論の変遷と展望——「緩い結合」という視座からのアプローチ—— 心理学評論, *46*, 564-583.
- 櫻井 茂男 (2019). 完璧を求める心理：自分や相手がラクになる対処法 金子書房
- 桜井 茂男・大谷 佳子 (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, *68*, 179-186.
- Shafran, R., Cooper, Z., & Fairburn, C. G. (2002). Clinical perfectionism: A cognitive-behavioural analysis. *Behaviour Research and Therapy*, *40*, 773-791.
- Stoeber, J. (2018). *The psychology of perfectionism: Theory, research, applications*. Routledge
- Stoeber, J., & Otto, K. (2006). Positive conceptions of perfectionism: Approaches, evidence, challenges. *Personality and Psychology Review*, *10*, 295-319.